關西大學　中國文學會紀要　第17號（平成8年3月）抜刷

「イソップの東漸」補遺

――「上海施医院」その他――

内　田　慶　市

「イソップ東漸」補遺
—「上海施医院」その他

内　田　慶　市

内田1994においては，「イソップの東漸」と題して，漢訳イソップの『意拾喩言』を中心に，宣教師（近代来華欧米人を代表するもの）の翻訳観・文化観について論じてみたが，その中で，『意拾喩言』系統の一つである『伊娑菩喩言』の日本への伝来についても若干言及した。今回はこれに関わる１つの小さな問題について述べてみることにする。

1.　『伊娑菩喩言』の日本伝来

漢訳イソップの日本への伝来については，たとえば新村出1973ａに以下のようにある。

> ともかくも此の漢訳本『意拾喩言』の系統本は，幕末嘉永安政年間に至つて，日本に伝来した。駿河田中藩の増田貢その号を岳陽といつた人の写した『伊娑菩喩言』と題する写本を岡崎桂一郎博士の蔵本によって大正初年に見たことがあるが，それには長州の穴戸璣（山県半蔵，号世衡）が安政三年丙辰陽月に跋を加へたものと，又安政四年十一月二十日吉田松陰が再跋を施したものを書き加へてある。私はそれらの跋文のない普通の写本を蔵してをる。いずれにしても『意拾喩言』から出た同本である。穴戸の跋によると，『喩言七十三条，蓋し英人の訳する所にして上海施医院の活字刷板に係る，其の地名を挙げ時世を説くや皆之を支那に仮る，是れ訳者の苦心する所なり，此の書未だ清

舶の售販を経ず，某氏の嘗て之を俄艦中に獲たる所と云ふ，亦罕覯の珍籍なり，余借覧数日乃ち騰して之を篋す。宗本間間人物飛走を図す，今騰写に不便なるを以て尽く之を削る」とある。……安政初年長崎の露艦から得たこと，支那から直接の輸入ではなかったこと，その活版本は広東版ではなくて上海版であること等が知られる。

新村出記念財団重山文庫蔵写本『伊娑菩喩言』には新村博士の次のような書き込みがある。（新村1973 b）

上海施医院活字版ノ『伊娑菩喩言』，安政ノ初年頃俄船中ヨリ得テ穴戸璣安政三年（丙辰）之ヲ写ス，翌年（丁巳）吉田松陰松下村塾ニ於テ門下ノ岡部生ヲシテ写サシメ，之ニ跋ス

新村博士はさらに，吉田松陰の『幽室文稿』等を援用して，漢訳イソップの日本への伝来を次のように結論づけている。

されば『意拾喩言』を断片でも完本でも日本人が見たのは，嘉永六年即ち1853年のころ，喩本の翻訳及び初刊の1840年より十三年の後にあたるわけである。（新村1973 a）

前坊洋1989においても，新村博士をうけて，次のように言う。

英訳を直接手にするよりもはやく，『意拾喩言』系統の一本が幕末の日本につたえられた。それは広東版ではなく，「上海施医院の活字刷版」であり，「喩言七十三条」をおさめていた。

ところで，この「上海版」つまり「上海施医院活字刷版」の「上海施医

院」とはいかなるものであろうか。新村博士はこれについては言及されていないし，前坊 1989 では<「上海施医院」は医療伝道施設であったろうし>と言う形で触れられているにすぎない。拙稿1994においては，<「上海施医院」は「土山湾印書館」のことかとも思われますが，「土山湾」はカソリックの出版社であり，断定はできません>としたが，これは誤りであろう。

2. 高杉晋作の上海行と『伊娑菩喩言』

実は『伊娑菩喩言』は，宍戸あるいは吉田松陰が手にした九年後の文久二年（1862）にも日本に伝来している。高杉晋作等の文久二年上海行の際であり，そしてそこに「上海施医院」がいかなるものかを暗示する記述がある。

文久二年（1862），幕府は貿易帆船千歳丸（Sen-zai-maru）を上海に派遣した。長崎会所調役沼間平六郎を筆頭に高杉晋作，中牟田倉之助，五代才助といった維新の志士など総勢五十一名が乗り込み，四月二十九日長崎を出帆し，五月六日上海入港，二ケ月の滞在の後，七月五日上海を離れ七月十四日長崎に帰着した。この時の記録として，『文久二年上海日記』（東方學術協會1946），『中牟田倉之助傳』（中村孝也1919）の「上海渡航」の章，『東行先生遺文』（1916）『高杉晋作全集』（1974）に収められている「遊清五録」などがある。また米澤秀夫の『上海史話』（1942）にも「幕末の上海派遣船千歳丸」「上海における高杉晋作」の章がある。

これら一連のいわゆる「上海渡航日記」は，当時の上海の状況を知る上で，非常に貴重な資料である。たとえば，当時の上海の繁栄振りを彼等は次のように記述している。

上海滞在之洋船百艘も可有之氣歟。唐船は一萬艘も可有之氣歟。誠に存外之振にて候事（中牟田「上海行日記」）

午前漸く上海港に至る，ここは支那第一繁盛の津港なり，歐羅波諸邦

商船，軍艦數千艘碇泊，檣花林森して津口を埋めんとす，陸上はすなわち諸邦商館の紛壁千尺，ほとんど城閣の如し，その廣大壮烈なること筆紙を以って盡すべからざるなり（高杉「航海日録」）

高杉等の一行は，五月六日上海に入港し，オランダ領事館前に碇をおろす。その後，九日に船から「宏記洋行」という旅館に移り住むことになる。

オランダ領事館について，高杉は「默耶洋行」（「航海日録」），日比野輝寛『贅肬録』（『文久二年上海日記』所収）では「黙耶洋行」と言う。米澤1942では，「和蘭館默耶洋行とは，T. Kroces and Co. のことで，クレースなる商人が領事を代理してゐたのである」（135P）とある。中牟田も領事を「チ・クルース」と記しているが，これは『清季中外使領年表』（1985）でも確認できる。その「荷蘭駐上海領事年表」によれば，「咸豐十一年　1861年哥老子 P. Theodore Kroces」とある。当時，オランダ領事館がいかなる場所にあったかについては，その前に停泊したとあるから，まずバンドの近くであることは間違いない。旅館の「宏記洋行」は，中牟田によれば，「和蘭館に隣れる」とあり，高杉は「宏記館の地名洋徑濱」と言う（「上海掩留日録」）。フランス領事館へも度々出かけていることから，その近くということになり，「洋徑濱」と「公館馬路」（現在の金陵東路）の一角ということになるであろう。明治の終わりから戦前に出された『上海指南』などには，オランダ領事館の位置がバンド付近ではなく，静安寺や今の延安路の西の方にあったりするものがほとんどであるが，架蔵の民国26年6月（1936）発行の「上海市區域現状圖」にはバンドから入り「公館馬路」のフランス領事館の前に，「和蘭領署」が描かれており，恐らくその位置に当時もあったものと思われる。この位置ならば，「夕方少し城内へ」ということも可能な場所である。中牟田の「六月八日夕刻のことなりき。子爵は所用ありて外出し，大東門より城内に入り，小東門より出でんとせしに，日没近きため云々」という行動がそれである。

公館馬路であれば，大東門や小東門という現在の「十六舗」辺りにも近い所である。

さて，彼等は，上海滞在中，しばしば書店や，ある人物を訪ねて，そこで多くの書籍を購入しており，その中に『伊娑菩喩言』も含まれていた。ある人物とはイギリスロンドン会の宣教師「慕維廉」(William Muirhead) その人である。

以下，高杉の「上海掩留日録」の中の関連部分を示す。

十六日，又至馬路外書坊，得書籍歸

十九日，雨，午後至馬路外書坊，與店主人談，看書籍歸

五月念三日，朝與五代訪英人ミュルヘット，々々々々者耶蘇教師，施耶蘇教于上海士民，城内教堂ミュルヘット之所關也，ミュルヘット之所常居，亦有教堂與病院，謂施醫院，總西人教師之施教于外邦，必携醫師，有士民病且窮者，乃其病使入此教，是教師致教于外邦之術也，……需聯邦志畧等之書歸

念五日，朝，與五代訪英人ミニュヘルト，不在，空歸

念七日，與中牟田至英人ミニュヘル，需上海新報，數學啓蒙，代數學等之書歸

念八日，書坊來，需書籍

念九日，訪書坊得書籍歸館

六月十六日，晴，與中牟田外行，……，去訪ミニルヘル，不在，空歸館

『中牟田倉之助傳』によれば，この上海行で中牟田，高杉が入手した書籍は次の如くである。

通商税則前後條約　但寫本　一冊

奏准天津新議通商條約　一冊

＊數學啓蒙　十部

＊代數學　十部

＊代數積拾級（代微積拾級の誤りか一筆者）　一部三冊

＊談天　一部三冊

＊地理全志　一部二冊

＊大英國志　一部二冊

＊聯邦志畧　一冊

爵秩全函　四冊

＊六合叢談　全一冊

＊新約全書　全一冊

＊伊娑菩喩言（強調一筆者）　一冊

商賈便覧　一部八冊

＊重學淺説　全一冊

＊通用雜話　全一冊

＊中西通書　全一冊

大清同治元年時憲書　全

長髪賊著述書　但寫本

皇朝一統輿地全圖　但折本　八冊

金陵癸甲撫談　一冊

上海新報　第二號ヨリ五十八號マデ

清朝日奏書　九冊

四書譯譯ノ英書　但英板

航海書　但英板

日本文典　但英板

日本和蘭英吉對譯書　但英板

千八百五十六年上海暦　但英板

千八百六十二年上海暦　但英板

清國英國條約　但英板

日本英國條約書　但英板

日本阿墨利加條約書　但英板

日本ポルトガル條約書　但英板

千八百六十一年天津其外運上ノ書

千八百六十一年上海運上ノ書

千八百六十一年福州運上ノ書

千八百六十一年潮州運上ノ書

ピホー河案内書

福州湊案内書

上海内地規則書

これらの書籍のうち，＊印をつけたものは，いわゆる科学，宗教関係の「翻訳書」であるが，『伊娑菩喩言』『新約全書』を除いては，ほぼ翻訳者や出版社，出版年を特定できるものである。

『數學啓蒙』は偉烈亞力（Alexander Wylie）訳，『代數學』『代微積拾級』『談天』は偉烈亞力と中国人李善蘭の共訳，『重學淺説』は偉烈亞力と中国人王韜の共訳，『六合叢談』は偉烈亞力主編，『地理全志』『大英國志』は蔡維廉訳である。『中西通書』は偉烈亞力や艾約瑟などによる科学宗教等の内容を含む総合年鑑であり，1863年までは上海で発行されたものである。『聯邦志畧』は裨治文（Bridgman）によるもので，はじめ『美理哥國志畧』として1838年にシンガポールで出版され，その後，上海で1862年第三版が出版される際に『聯邦志畧』と改名したものである。『新約全書』については，確定は難しいが，年代を考慮すれば，恐らくは麦都思（Walter Henry Medhurst）によるものと思われる。そして，以上の書籍はいずれも「墨海書館」で出版されたものである。

なお，『通用雑話』は，正式タイトルを『華英通用雑話 Chinese and

English Vocabulary』(1843?) と言い，かの『意拾喩言』の著者である羅伯聃 (Robert Thom) によるもので，外国人のための中国語教本（単語，短文集）である。その序文や音韻説明の部分では「清文」も使われている。これに関しては，いずれ稿を改めて論ずるつもりである。

3. 「上海施医院」とは

さて，問題の「上海施医院」である。

これら一連の書籍を高杉等は多くミュアヘッド（慕維廉）の所で購入している。ミュアヘッドが関係する出版社と言えば，それは「墨海書館」ということになる。（と言うより，1860年以前に上海でのプロテスタント系翻訳出版機構は「墨海書館」以外には存在しないのである）

墨海書館 (London Missionary Press) は1843年，イギリスロンドン会 (London Missionary Society) のメドハースト（麦都思）によって創設された。ミュアヘッドもその中心人物の一人であった。初めそれは上海県城北門外に置かれたが，その後，英国租界が作られ (1845)，ロンドン会が山東路（河南路以南）の土地を購入して，教会活動基点としたのにともない（メドハーストの名を取ってその一帯は「麦家園」と呼ばれ，1854年に戴徳生 J. H. Taylor が上海に来たころにはすでにその名があったという—— 『上海宗教史』793 P)，咸豊十一年 (1861) にその場所に移った。

イエスの教えにもあるが如く「病を治し福音を伝える」こと，つまり，医療伝道は出版，翻訳更には教育事業とともに，宣教師が最も力を注いだことの一つである。佐伯1949によれば，1859年当時，在華宣教師総数 214 名中，28名が医者であり，1887年には在華宣教師総数1296名中，実に 150 名が医者であったという。

ロンドン会では，雒魏林 (William Lockhart) がおり，舟山の定準で眼科診療所を開設していたが，その後，1943年に舟山から上海に移って，

1944年に南門に診療所を開いた。診療費が無料ということで，遠くは，蘇州，松江，崇明島からも患者が訪れ，1844. 5. 1から1845, 6. 30まで患者数は延べ一万以上にも上ったという。その後1846年，場所を北門外に移し（胡道静1987によれば墨海書館の隣），「仁済医館（Chinese Hospital)」を開設した。さらに，1861年に墨海書館と同じ山東路の「麦家園」に移転し，名称も「仁済医院（Shan Tung Road Hospital for Chinese」となった。『上海縣續志』によれば次のようにある。

> 仁濟醫院在公共租界山東路即麥家園・咸豐初年西人創設・邑向無醫院・凡患病或受傷者輒赴焉・光緒三十二年及宣統二年間・先後改建男女病房・規模益備・院設總理並中西董事・募捐充費（『上海縣續志』巻二）

メドハースト，ミュアヘッド，エドキンズ達は，この「仁済医院」で，毎日，患者達に「福音書」を配り，教えを説いたというわけである。

再度，高杉の五月二十三日の日記をながめてみる。

> 五月念三日，朝與五代訪英人ミュルヘルト，々々々々者耶蘇教師，施耶蘇教于上海士民，城内教堂ミュルヘット之所關也，ミュルヘット之所常居，亦有教堂與病院，謂施醫院，總西人教師之施教于外邦，必携醫師，有士民病且窮者，乃其病使入此教，是教師致教于外邦之術也，……需聯邦志畧等之書歸

「ミュルヘッドが管轄する城内の教堂」に対して，「ミュルヘッドの常居するところにもまた」と言うのだから，この常居する場所は，城外である。そして，そこには「教堂つまり教会と病院がある」と言い，それを「施医院」というわけである。そこで，『聯邦志畧』などを購入したというのである。となれば，教会と病院，そして出版機構は同じ場所になくて

はならぬ。確かに，以下に述べられているように，当時（高杉等が上海を訪れた頃，つまり1862年当時），病院と出版社は隣接していたのである。

> 滬上之有鉛印書籍・始於同治初年西人創設之墨海書局・其地點在山東路・與仁濟醫館毗連（『上海小史』巻四―文化―書業1930）

教会が山東路にあったことは，たとえばポット（Pott, Francis. L. Hawks）の『上海史』（A Short History of Shanghai）に以下のような記載がある。

> 新天安堂（Union Church）の由來は遠く租界の最も初期の時代に遡る。ロンドン・ミッション會社のドクター，ダブリュウ・エイチ・メドハースト師が山東路構内（Shantung Road Compound）で一八四五年に外國人のために禮拝を司會したのを我々は見出のであるが，それ以後同會社のメンバーが更々々この禮拝を數年にわたって續けたのであった。そのなかにはウィリアム・ミェアヘッド師もあた。けれども，一八六四年に非英國國教會員だけが獨立して，分離した自由な教會を組織した。同年に最初の新天安堂が山東路のロンドン・ミッション會社の構内に代って建てられた。（117P）

米澤1942に収録されている「千八百五十三年頃の上海地圖」（恐らくはラニング&クーリング著『上海史』収録のものに同じ）には，「麦家圏」と思われる区域内に，西から順に，London Mission Hospital, Residences, Printing Office が並び，Residences の南に Chapel が描かれている。ただ，その Hospital が「仁済医院」と見てよいものかは疑問が残る。何故なら，「麦家圏」に「仁済医院」が移るのは1861年以降であり，1853年頃はまだ北門外にあったからである。

こうしてみると若干の疑問は残しつつも，「上海施医院」とは実は「仁済医院」であり，「上海施医院印刷」とは「墨海書館印刷」と考えるのが妥当のように思われる。

つまり，「施医院」あるいは「上海施医院」とは固有名詞ではなく，いわば「俗称」と見るべきである。『上海史話』では，高杉の日記のこの部分を「醫を施すの院なりと謂ふ」と訓読しているが，それは的を得たものである。北京にあって，『中西聞見録』を発行した「京都施医院」とはその性格を異にするものと考えられるのである。

以上の推論を確かめるべく，先日，復旦大学歴史地理研究所の周振鶴博士に調査をお願いした所，次のような回答を得た。「古い人の話しでは，当時，仁済医院を上海施医院あるいは山東路病院と呼んでいた」というのである。

4. その他

『意拾喩言』と『伊娑菩喩言』（あるいはその重刻と考えられる『漢訳批評伊蘇普物語一名伊娑菩喩言』）『漢訳伊蘇普譚』の言語的な差異であるが，前坊氏は「収載談題名の異同，文章の相異，ともにほとんどとるにたらぬ」と言われているが，そう断ずるには問題がある。氏の挙げられた例だけとっても，『意拾喩言』の「臭」を「悪」とし，「食」を「日」とし，「莫」を「勿」とするのは，明らかに「方言」語彙を採用していることが窺えるものである。つまり，後者のものには上海方言的要素が入り込んでおり，メドハーストなどの上海在住の人の手が加わったことが予想される。

また，『意拾喩言』の著者である Robert Thom の二つの著作について，その複写物を京都大学人文研の斎藤希史氏のご好意により入手することができた。一つは，先にも少し触れた『華英通用雑話』であり，いま一つは『正音撮要』である。後者は1846年「寧波華花聖經書房」のものであり，静高亭の『正音撮要』の課文に音注，英訳を加えたものである。いず

れも『意拾喩言』の言語的特徴を探る上で貴重な資料になると思われるが，今後の課題である。なお，本稿は平成7年度学部共同研究の一部を成すものと位置付けられる。（1995．10．20.）

<参考文献>

『上海縣續志』民國七年刊本，中國方志叢書・華中地方・第十四號

東行先生五十年祭記念會1916『東行先生遺文』民友社

中村孝也1919『中牟田倉之助傳』杏林舍

F. L. Hawks Pott 1928『A Short History of Shanghai』Kelly & Walsh, Limited

胡祥翰1930『上海小志』（『上海雜與上海人叢書』上海古籍出版社1989所収）

土方定一，橋本八男訳1940『ポット上海史』生活社

米澤秀夫1942『上海史話』畝傍書房

東方學術協會1946『文久二年上海日記』全國書房

佐伯好郎1949『清時代の支那基督教（支那基督教の研究4）』名著普及会

小澤三郎1973『幕末明治耶蘇教史研究』日本基督教団出版局

新村出1973a「『伊曾保物語』の漢訳」（『新村出全集』第七巻，筑摩書房）

新村出1973b「西洋文学翻訳の嚆矢」（『新村出全集』第七巻，筑摩書房）

奈良本辰也監修1974『高杉晋作全集』新人物往来社

胡道静1987，1988「印刷術"反饋"與西方科學第二期東傳的頭一個據點：上海墨海書館」『出版史料』1987年4期，1988年1期

湯清1987『中國基督教百年史』道聲出版社

鄭祖安1988『上海地名小志』上海社会科学院出版社

前坊洋1989「イソップ，東アジアへ」（『近代日本研究6，慶應義塾福澤研究センター）

唐振常主編1989『上海史』上海人民出版社

張仲礼主編1990『近代上海城市研究』上海人民出版社

薛理勇1990『上海地名路名拾趣』上海書店

村松伸1991『上海・都市と建築1842—1949年』Parco Picture Backs

顧長聲1991『傳教士與近代中國』上海人民出版社

阮仁澤編1992『上海宗教史』上海人民出版社

熊月之1994『西學東漸與晚清社会』上海人民出版社

内田慶市1994「イソップ東漸——宣教師の『文化の翻訳』の方法をめぐって」『泊園』第三十三号，泊園記念会